

100 さんじょうじんじゃほんでん  
**三条神社本殿**



指 定 市有形文化財 平成15年 3 月 6 日  
 所在地 入 沢  
 所有者 三 条 区



三条神社は山城の入沢城跡の西方にあり、もとは八幡社と称した。祭神は、応神天皇・神功皇后であったが、大宮諏訪神社に合祀され、現在は古来三条氏の氏神であった熱田神宮を明治41年（1908）に祀る。享保4年（1719）の造営である。信州全体の様式からみると元文～寛延期（1736～1750）の一般的な様式であるが、佐久地方では正徳・享保期に早くもこうした様式が表れていたことがわかる。本殿は、間口2.5mの規模の二間社流造、柿葺の社殿で、上屋内にある。

本殿軸部は、礎石に円柱（下八角）を立て、足元貫・足固貫を通し、縁長押、半長押、内法長押を打つ。頭貫には象・猿などの彩色された木鼻を付ける。柱間は正面は幣軸付板扉、ほかは板壁とする。縁は三方に樽縁（正面は切目縁）を回し、高欄は逆蓮の親柱とする。縁板をうける縁葛と土台の間は堅羽目板張とする。脇障子は板で、竹の節を付け、柱上の肘木から竹の節まで海老虹梁状の装飾を付ける。柱上の組物は拳鼻付きの出組・実肘木とし、造り出し支輪を付ける。肘木は下端をわずかに削った程度の独特の曲線である。中備は板葺股とする。妻飾は、二重に虹梁を架け、大瓶束を立てる。大瓶束上の左右および前方に拳鼻をつけ、大斗・実肘木で虹梁・桁を受けている。懸魚は齧懸魚鱗付き、桁隠しは齧懸魚とする。

向拝は、中央の柱は省略し、浜縁を設け、下長押・上長押を打ち、木階五級を置き、登高欄を付ける。柱は几帳面取角柱とし、水引虹梁を入れ、木鼻を付ける。組物は皿斗付きの連三斗・実肘木とし、中備に本葺股を入れる。肘木下端の曲線はわずかに弧をつけた程度の個性的なものである。組物の内側には手挟を付ける。手挟のうち両端のものは牡丹の彫刻で胡粉彩色されており、中央のものは線形を付けた板に絵様をつけ彩色は施していない。母屋との間の繁ぎ（海老虹梁）はない。軒は、前面・背面とも二軒繁垂木で、飛檐垂木先端には反りと扱きを付ける。屋根は柿葺で、箱棟を載せ、鱗付き鬼板とし、置千木および堅魚木（3本）を置く。

社殿は軸部・彫刻などに胡粉・弁柄の彩色がみられる。彩色のある部分としては、頭貫の象・猿の木鼻に胡粉、水引虹梁の絵様・錫杖彫に弁柄、柱・長押に弁柄が残る。

（吉沢政巳工学博士調査による）